

18世紀のイタリア・ガイドブック研究

——（１）フォルクマン——

有 川 貫太郎

「私はこれからもせっせと手紙を差し上げましょう。お願いですが、フォルクマンのイタリア案内を図書室からでも借りて手許に置いておいてください。いつもその本の何ページであるかを書いておきますから、私の手紙を読むときはその箇所を見ておいてください」¹。イタリアへの旅に出て半月あまり、ヴェローナの宿からゲーテはシュタイン夫人にこのように書き送っている。そして旅の途路、ゲーテは折に触れて「まず旅行かばんからフォルクマンを取り出して」²その土地の必要な旅行情報を得ていた様子は、「1786年イタリア旅行日記」および「イタリア紀行」の記述に散見される言及からうかがえる。また、ローマでも「私はこれから尊敬すべきフォルクマンのローマのことを記した第2巻を調べて、まだ見ていないものを抜き出そうと思っている」³（2月16日）。

ボローニャでは御者（兼案内人）が先を急ぐゲーテのためにと、短時間で市街の名所旧跡を案内しようと引き回すので「私のフォルクマンに印をつけるひまもないくらいだった」⁴（10月18日）。続けて「これでは将来この記号を見てすべてを回想しうるかどうかが危ないものだ」（同所）と書いているところから判断すると、ゲーテにとって「フォルクマン」は旅程の基礎データ集としての役割も果たしていたことがうかがえる。

しかしまた、「あの立派な、非常に有益なフォルクマンの案内書には、しかし時おり私と意見を異にしている箇所がある。」⁵（1787年5月28日 ナポリ）、や、「わが親愛なるフォルクマンは、他の点では非常に注意深くまたガイドとしてきわめて有能であるのに、ああいった外国の批判者をまったく便りにしきっているように思われ、そのため、彼自身の評価は非常に奇妙なものとなっている。例えば・・・」⁶などからうかがえるように、その記述内容、とくに美術品の評価ではフォルクマンは絶対の羅針盤というわけではなく、ゲーテは自立的な鑑賞者である。

ここに言う「フォルクマン」とは、同名の著者の、18世紀後半のスタンダードなイタリア・ガイドブックである。本稿はこのガイドブックの概略を紹介し、その特徴を考えようとするものである。

（一）出版の背景

17世紀から18世紀にかけて、おびただしい数の旅行ガイド、とくにイタリア・ガイドが現れた⁷。それは貴族たちの政治的キャリアにとって、大陸各地を経て最終的にはロー

マに至る「グランド・ツアー」が必須であったからであり⁸、またその後は、市民階級の自覚に伴い、彼らの求める人間性涵養の根幹として古代の文物との邂逅が教養プログラムの必須の要素となり、それが多くの人々をイタリアへと誘ったからである。古典文化の原郷であるギリシャはオスマントルコの治下であり、昔日のギリシャではない。また距離や交通手段から考えてもまだ一般の人々の旅行目的にはなりえなかった（ギリシャの独立は1832年）。これに反してイタリアへは、アルプス越えの難関があるとはいえ、古来、「すべての道はローマに通ず」で旅の道は整っていた。そしてルネサンス以来、歴代の教皇たちは古代ギリシャの文物——多くは古代ローマ時代の「複製」であったが——をローマの地に復活させていた。

そうしたローマ旅行者たちの需要に応じてかずかずのガイドブックが現れた中で、「folkman」はそれまでの類書を集大成し、18世紀後半を代表するものとなっている。これを詳細に検討すれば、当時の人々をイタリアに惹き付けたものの姿が「旅行」という行為を通して見えてくるかもしれない。

「folkman」の正式なタイトルは「歴史的批判的イタリア事情 風習、政治、商業、学問事情、そしてとくに、美術作品の解説を含む」で（末尾写真参照）、1770年にライプツヒで初版が刊行されている（以下、本文からの引用ではHKNと略記）。

タイトルに付された、「歴史的批判的」とはどういう意味だろうか。historischは、グリン辞典には「思案を容れない事実の報告」という説明の項があることを考えると⁹、タイトルの形容詞historischは、うわさや伝聞による記述ではなく、事実に基づいた、というコンセプトを謳っていると解される。また本書の成立について著者が述べているように、本書は先行する多くの類書を参照し、それらを取捨選択して成ったものである。その際重要な選択基準は、特定の先入観からの記述は極力避ける、ということであった。「歴史家同様、旅行ガイドブック作者も、祖国と宗教を持つてはならない」のである（序文XXX）。kritischはそのような客観的記述態度を表していると解される。私見に基づく記述を含む多くの類書に対して、事実に基づく客観的記述態度が標榜されているわけである。

出版の動機については序文のなかで、英独仏それぞれにイタリアガイドの好著には事欠かないのだが、「旅行者がひとしく必要とするようなすべてのことがらについて正しく詳細な知識を与えるののではない」。よって本書はそれらの短所を補い長所を取って、より完全で使いやすいものを提供しようとしたものである、と説明されている¹⁰。そして第一版の序文は約20ページ以上を費やして先行する類書の詳細な検討に当てられている。

folkmanが類書を評価する基準でとくに重要なことは、情報が総合的であるか、さらにその情報が偏った立場から書かれていないかということである。後者の意味で、

イタリア人の自身の手になるものはフォルクマンの意に叶うものではない。「現地の人
は外国人にくらべて何事もよりよく判断できる、ただ祖国愛が身びいきにならなければ
の話だが。しかるにまだ一人のイタリア人も、どの点においても興味ある（merkwürdig）
この国の記述をしようとしたものがない。従ってそうしたものが現れるまでは、外国人
の手になるものに頼らざるをえないのである」（序文XXII - XXIII）。

それではこの分野の先進国であるイギリス、フランスのものはどうか。たとえばもっ
とも広く使われた **Misson** のもの¹¹ は、記述が簡単すぎ、また現在では情報が古い、政治、
産業産物についてはまったく言及がない、美術の知識が少なく、絵画や古代彫刻につい
て語るところはさほど教えられる所がない（nicht unterrichtend genug）、さらに彼が旅
行者への情報として与えている情報、例えばものの値段はまったく約に立たない、新版
でもさほど改定されていないし、古典の引用も正確でないことが多い、等々（序文X）。

イギリス人の手になるものとしては **Wright** がベストである。美術（古代を含めて）
に関してはすぐれているが、「政治や学問についてはふれていない」ことをうらみとす
る（序文XVI）。このように、内容の点で、イタリア全般について、すなわち「絵画、
古代、学問、自然および政治」について「総合的に」情報を与えるものでない点に不満
がある（HKN I 8）。政治体制、自然等の情報と同時に、絵画、古代文明、学問の状況など、
市民層の新しい教養プログラムの要求を反映した情報を与えてくれるものが求められて
いることがわかる。

フランスでは「フランス人のイタリア旅行」¹²（8巻）が最もすぐれている。
著者は匿名であるが、実は天文学の分野でも業績をあげている **la Lande**（原文
のまま）であり、彼は趣味（美術鑑賞）の分野でも見事な才能を示している。彼
の著ははまちがいなくこれまでに書かれた最良のイタリア案内であり、本書もこ
れをベースにしている。（序文XIV）

このように、フォルクマンが底本とした **Lalande** には全幅の信頼が置かれており、ほ
とんどそのままの翻訳に近い部分もあることを公言している。旅行のルートがフラン
スから入ることになっている点まで、彼のものに従った結果である。「イタリアをくま
なく見聞しようとする者にとってこのルートは完璧で、見逃すものはない」（序文XIII）
のだという。「美術品、とくに絵画を見ることがイタリア旅行の目的であるので、これ
には多くの紙面を割き、ほぼ **la Lande** の評に従ったが、短くしたところもある」（序文
XXVII）

ただし、とフォルクマンはいう、本書は単なる翻訳に甘んじたというわけではない
（keinen bloßen Uebersetzer abgeben）。必要に応じて自分の見聞による情報をおりませ
た。フランス人にとって重要なものでも、ドイツ人にとって重要でないことは削除し
たり、またその逆もあった（序文XIV）。

もうひとつの選択基準である中庸・中立ということは、主として対カトリック意識を指していると思われる。イギリス人やドイツ人のものにはときにカトリックをからかおうとする傾向がある。つまらないジョークを言うだけのために不要な記述をしている、という（序文XXX）。新教国イギリスやドイツからイタリアを訪れる者には、日々カトリックを意識する機会が多かったことがうかがえる。

（二）体裁と内容

本書の体裁はほぼA5版サイズで、各巻の厚さは45ミリ前後、相当に大部なものである（末尾写真参照）。第2版から、各巻は2つに分けて使う事ができるようにした、とあるから、当時は簡便な装丁であったものと思われる。これは全く実践的配慮で、それぞれの巻が大部であるため適宜6分冊にして利用できるよう、「携行の便を考え、本書をどこにでも持参できるようにした」ための処置である（序文Ⅷ）。

体裁上、現代のガイドブックとの大きな違いは、地図や図版を含まないことである。当時は、ピラネージやヴァージなどすぐれた銅版画家たちが、詳細な絵図を多数出版していたし、地図も都市図などを含めてすぐれたものが作られていた。

全体は全3巻から成り、その構成とページ数は、

第1巻 イタリア予備知識。北イタリアローマまで 808ページ

第2巻 ローマ 943ページ

第3巻 ローマ以南ナポリまで。全体の索引。 932ページ

である。ナポリ以南とシチリアは扱われていない。その理由は「旅行者がこの地域を訪れる事は非常にまれであるし、わざわざ旅に難渋しつつ訪れても残されている見所は少ないからである」（序文XXI）。Magna Graecia とシチリアは古代遺跡の宝庫ではある。しかしゲーテのようにナポリ以南シチリアまでの旅を敢行するだけの時間と（恐らく）財力に恵まれた人はまれであったということだろう。

全体は、まずはじめに第1巻の約6分の1の分量を割いてイタリアについての予備知識的説明を置き（1～138ページ）、その後北のサルディニア王領サヴォイ、ピエモンテからはじめて各領封、都市ごとに南下して記述されている。この、フランスを出発地とするかのようなコースで始まっているのは、前述したように全体の構成をフランスのLalandeの本を踏襲しているからである。

第1巻のはじめに置かれた予備知識的イタリア案内（Einleitung）の項目は以下のようである。

イタリアの美しさ／本書出版の動機／イタリアの習俗一般について／イタリアの政治／美術、絵画、彫刻／絵画の知識が有用な理由／古代の絵画についての注釈、古代彫像の研究／建築、銅版画制作術／学問、美学の状態、アカデミー／音楽、

演劇についての一般の趣味／イタリア人一般についての観察／イタリア語を学ぶ必要性、その最良の方法／通貨／旅程、乗り物（交通手段）、税関／イタリアの画家の編年の一覧（ローマ派、フィレンツェ派、ロンバルド派、ヴェネチア派）。一見して百科全書の記載を思わせる。138ページを費やしたこの長大な導入のあとに、第1章サルディニア王領から各国（邦）と都市のガイドが続く。そして第40章シエナからローマへ入る直前で第1巻は終わる。

第2巻は、943ページすべてをローマにあてている。その構成は第1巻と同様で、まずはじめに170ページにわたってローマについての予備知識が百科全書的に概略される。その内容は、次のような項目を含む。

- 1 ローマの面積、人口。歴代ローマ教皇。ローマの復興美化に功績のあった教皇、ローマの碑文の数
- 2 ローマについてのすぐれた案内書と画集（銅版画）のリスト
- 3 市の区分。サン・ピエトロ寺院の歴史
- 4 サン・ピエトロ寺院の広場、オベリスク、柱廊、美術館について。
- 5 サン・ピエトロ寺院の内部、主祭壇、Cattedra
- 6 サン・ピエトロ寺院の屋根と大円蓋の構造
- 7 サン・ピエトロ寺院の地下
- 8 ヴァティカン宮殿
- 9 ヴァティカン、ラファエロの絵画室
- 11 バルヴェデーレの彫刻、ヴァティカン美術館、クレメンティーノ、庭園。
- 12 図書館、武器収蔵室
- 13 ローマの城門、橋、テベレ川、水道

これを見るとヴァティカンに関する記述が大半を占めている。ローマはヴァティカンが統治する教会国家（Kirchenstaat）であった。

以上の予備知識的案内のあとに、第1区 Rione de Monti から始まって、第14区 Rione di Borgo すなわちヴァティカンまで、各区の記述が続く。さらに以下数章を割いて、ヴァティカンにおける行政的なことがらが説明される。例えば第2章は教皇選挙にまつわることがらが、いくつかのエピソードを交えて紹介される（HKN I 717-736）。つぎに約100ページ7章にわたってローマの各種行事の記述、そして最後に7章90ページにわたって、ローマ近郊の土地、例えばハドリアヌス皇帝の別荘のあったティヴォリなどが紹介されて第2巻が終わっている。

第3巻はローマからナポリまでの旅程、ナポリおよびその近郊である。記述の構成は

1、2巻と同様である。このように、訪ねるべき地についてまず百科全書的に知識を提供するという記述スタイルは、現代の Baedeker, Michelin, Blaue Führer を代表とする旅行ガイドブックにまで踏襲されており、すでに18世紀後半にこのスタイルが確立されていたことになる。なおこの巻には、全体にわたっての、詳細をきわめた索引が付されているが、これも良心的ガイドブックには必須のものとして現代まで受け継がれている。

以下、本書の内容としてはじめに、「予備知識」から当時の旅の実際を垣間見させる項目をいくつか紹介したい。

(三) 旅の実際

まず交通手段であるが、貴族階級でない者にとって、自前の馬車を連ねてということは不可能である。よって、

郵便馬車が最も早く、サービスもよい。値段はまちまちで、高いのはサルディニア、ミラノ、ヴェネツィアの便で、これは異常に高く (ungemein hoch)、ほとんどドイツの2倍である。一方フィレンツェ、教皇国家、ナポリのものははるかに安く、サービスが良く、また石ころ道や山道でもできるだけ速く走ってくれる。ロンバルディアの道は平坦で良好 (ただし雨でぬかるんでいなければの話だが)。欠点は、旅行者の求めに応じて停車するということがないことだが、アペニン山脈までは道中は単調で、とくに降りて見学するような遺跡もないので、値段さえ高くなければ郵便馬車が良いということになる。(HKN I 86)

もうひとつの方法は Vetturini と呼ばれる御者と馬車を雇うことで、これは郵便馬車のように速くはないが、なによりも途中停車の自由がきく。アペニン山脈の道、旧アッピア街道、等は途中に見るべきものが多いのでこの手段がよい。距離の目安は一日30 (イタリア) マイル、2頭の強壯な馬からろばが引き、荷物300ポンドを積む。料金は一人一日1ドゥカーテンだが、距離が長ければ割安になり、大都市から大都市ならば、御者は帰りの客が拾えるので安くなる (HKN I 88)。

通貨事情

通貨に関しては、ついさきごろのユーロ統一前のヨーロッパを思わせる煩わしい事情が、諸国割拠のイタリア内で見られている。主としてフィレンツェ、ヴェネツィア、ローマの通貨が有力であったがローマ通貨はローマ以外では不利である、ミラノではほとんどヨーロッパ中の通貨が使える、というような事情が詳しく記述されている。また一般に「残った小額の通貨を他の邦に持ち出さないほうがよい」、「現金は多く持ち歩かず、しばらく滞在する大きな町で、銀行の証書 (Creditbrief) で必要な額を現金化すほうが

よい」（HKN I 85）などは現代に共通の旅の知恵であったようだ。

実践的な方法として

「大きな町に着いたらすぐにある額に対してすべての通用している貨幣を持ってこさせること、そうすればさまざまな種類の貨幣の種類と価値を知る事ができる。また現金を持ち歩かず、小切手にすべきである。多少の手数料はかかるがこれが最善である。（HKN I 84-85）

また、

「現在ローマでは非常な現金不足で、100zecchini のうち現金でもらえるのは20で、残りは各種の額の（5, 10, 20 scudi）銀行券でしかもらえず、この換金にまた苦勞するはめになる。こうした場合、フィレンツェかヴェネツィアの通貨を多量にもっているようにすると便利である。」（HKN I 84-85）

ということもあり、金銭の扱いには旅人はいろいろと難渋したであろうことが想像される。

所持品検査、税関

割拠する国々の境界を越えるごとに税関や所持品検査が待っていた。ローマでは「禁止された本あるいは疑わしい本を所持することは気をつけなければならない。聖職者の係官が読み、orthodox でないと判断されたら没収となる（HKN I 88）。

ヴェネツィア、フィレンツェ、ジェノヴァ、パルマ、モデナでは「禁制品は所持していない、商用でもない」と宣言すれば、通過させてくれる。そして税関吏にちょっと「おみやげ（eine kleine Ergötzlichkeit）」をはずめば煩わしい検査から解放される。税関吏がなにか文句をつけようとしたら「いや、ちょうどこれから税を払いにいくところで」と言えばよい、チップをもらえなくなるのであわてて手続きをゆるめに進めてくれる（besänftigen lassen）だろう（HKN I 90）。

治安

ローマでゲーテは「この三週間で四人もの人が殺された。今日も今日とてシュウエンディマンという優れた画家がヴィンケルマンと全く同じように殺された」と記した日もある（1786年11月24日）。ヴィンケルマンが帰国途次、北イタリアのトリエステで暴漢に襲われて命を落としたことは記憶に新しいことであった（1768年6月）。旅程の治安は当然、大きな関心事であったと思われる。この点に関しては、次のような記述が見られる。

道連れがある（Gesellschaft zu machen）ほうが快適なばかりではなくなにかと

好都合である。公道上で白昼襲われるということはめったに聞かないが、ピエモンテとミラノの境、またマッジョーレ湖付近ではあらゆる種類の盗賊（*allerei Diebgesindel*）に用心することが必要である。いずれにせよ、一人二人よりも、数人で旅行するほうがはるかに安全であることは確かである。連れや使用人の数が多ければ多いほど、道中の心配はすくなくなる。（HKN I 90）

言葉

言葉に関しては、イタリア語を学ぶことは絶対に必要である、という。「大部分の人はイタリア語しか解さない。上流階級はフランス語をいくらか話すが、少し込み入った話になるとイタリア語に戻る。」「社交の場に誘われても楽しい時をすごすことはできず一人ぼつねんと取り残されるばかり」だろう（KHN I 79-80）、というようなことは、時代を経ても変わらぬ事情である。そこでフォルクマンは、「旅行に行く数ヶ月前に真剣にこの言葉を学ぶべきである。文法の規則を学ぶほかに、多く聞くことが重要である。」「劇場で俳優の台詞を聞く事は大いに益がある。とくに上演される劇の台本を読んでおくとこれは効果を発揮する。こうすれば熟練の語学教師につくよりも短期間で上達できる」と忠告を与える。当時の語学学習事情がうかがえる。

そして彼の推奨する習得法はユニークであるが筋の通ったものである。この言語を早く学ぶにはゴルドーニの喜劇を注意深く読むのが良い、という。「それは日常会話のスタイルで書かれており、生活で遭遇するさまざまな話題がつぎつぎに登場するからである。多くの作品がドイツ語に訳されており、これを熱心に対比することによって言葉の習得は大いに容易になる。」（HKN I 81）

標準語についてはトスカーナ方言とされるのだが、*Favella Toscana in bocca Romana*（美しいトスカーナ語はローマ言葉のなかに）という諺を引いて言うには、「今日まちがいなくこのイタリアの首都で最も良い発音が見られるばかりではなく、最も正しく美しい発音で話される。ローマの表現に近づけば近づくほど、完全なイタリア語をマスターしたと自負して良い。」（HKN I 83）

（四）イタリア事情、プロテスタントとして

目次の紹介でもわかるように、フォルクマンはイタリアの全般について、自然、政治、文化にわたってきわめて詳細解説をしており、それは百科全書的と言ってよいほどのものである。その記述を貫く基調音として、彼のプロテスタント意識がある。とくに人々の風習を述べるに際してフォルクマンが強調するのは、その「不偏不党」の態度であるが、念頭にあるのは主として宗教に関すること、つまりカトリックの精神と制度の中で生きている人々を見る態度のことである。「自由主義思想をふりかざすのではなく可能な

限りことがらを党派精神を捨ててあるがままに記述しよう。宗教と真実と理性は互いに一致できるものである。それらは互いに緊密に結合しているのであるから。」(HKN I 9)

そうした態度は聖遺物やそれにまつわる伝説を扱うときとくに意識される。「カトリック信者がどのように信じようとも自由である。プロテスタントはいずれにしてもそれを信じないのである。それならば事実をただあるがままに語るのが最善である。」この中庸への配慮から、「聖遺物については深く立ち入らなかった。しかし聖者伝や奇跡は、絵画の説明には必要なことが多いのでこれを全く無視することはできなかった。その際、それを信じるか信じないかは読者に任せ、われわれの判断はくださなかった」、という姿勢が生まれる（序文XXXI）。このように、つとめて「プロテスタント的原罪」（ゲーテ）¹³からカトリックの風習を過度に厳格に見る事を自戒している。

したがってそういうフォルクマンは、カトリック世界の進歩は進歩として評価しようとする。たとえば寛容と言う点では、啓蒙の精神が行き渡るにつれ（*bey den sich immer mehr aufklärenden Zeiten*）イタリア人自身も次第に進歩を見せている、という。「たしかにカトリックが唯一の宗教ではあるが、大都市ではユダヤ人を受け入れている。」プロテスタントの旅行者も、不行跡によって非難を受けるようなことをしないかぎり、なんら心配することはない。「異端審問はローマにおいてすら非常に少ないし、誰も死刑を宣告されることはない。それはもはや以前の残酷さの影はない。」(HKN I 14f)（ちなみにジョルダノ・ブルーノが、今はのどかな観光スポットの一つとなっているカンポ・デイ・フィオーリで火刑に処されたのは、このときから170年前、1600年2月17日のことである。）またイタリアにおける出版の自由は、他のカトリック諸国に比べても大きいと映る。「イギリスやフランスの書籍も、他のそれほどカトリックでない国では禁止されるようなものが、ここでは翻訳されている」「本の検閲ももはやそれほど厳しくはない」(HKN I 15)。

とはいえフォルクマンの目には、イタリア人の宗教心情一般ははかなり惰性的なものに見えてくることは否めない。「イタリア人は誰しもミサのつとめ重視する。彼らはその行為を、救われるためには必要欠くべからざるものであると考えているのだが、べつにそれで心が浄化されることはない（*ohne daß das Herz dadurch gebessert wird*）。」ミサの外的な行為を、大部分の人は、自分の体がミサの場にいるということ（*die bloße körperliche Gegenwart*）だけが大切であると確信しているよう」に見えるのである（HKN I 9）。

このような多少ユーモアも感じられる観察には、批判的ではあっても民衆のカトリック信仰をあるがままに是認しようとするフォルクマンの「中庸の道」が感じられる。しかしながら、教皇庁そのものはどのように映っているか。

教皇国家とその支配の形態については、トップ（＝教皇 訳者）がしばしば変わ

るごとにそのお付きも同時に代わるので、政治のシステムは同じでもその進め方に大きな違いがあり、これを一般的に語ることはできない。役職につく者はその職を出世の手段（Mittel, sich zu heben）とみなす。したがって彼らが民衆の生活向上のことは考えず、ひたすら己の利益を得ようとするが生ずる。

と辛辣であり、批判の度合いは格段に強まっている。たしかに、

逆に、私利私欲のない優れた人は大いに敬意を受ける。事実いくつかの教皇治下では、真に功績をあげ、知識と才能を示した者には正当な栄誉を与えたものである。

が、しかしやはり結局は、

なにしろそのように真に立派な人は他の土地でもローマでもまれなことである。誰もがめぐってきたチャンスを逃すまいと自分の得た地位でなるべく多くを得ようとする。教皇が変わるたびに新しいスタッフが登場し、新しい企画を出しては自己と一族の利益をはかろうと奔走する。（KHN I 28）

という結果になる。そして、法王庁の政治の世界は次のように要約されている。

見かけをよそおうこと、気づかれぬように行動すること、たくみに敵のミスを利用すること、巧妙に敵の信用を得ること、あとでその信用を利用して打撃をあたえること、多言を弄して何も言わぬ技術、適宜うそを語る事、おお嘘で何か重大な用件があるかのように思わせること、自分が重要人物であると思込ませること、相手に大いに期待を持たせること、可能な限りどんなことにも首をつっこむこと、そして使ってもらえるチャンスを逃さない事、合法な手段であれ非合法な手段であれ信用させること、以上がローマにおける政治の原動力（Triebfeder）であり、長年この流儀で大立ち回りがなされてきた。そういうわけで教皇庁は、したたかで抜け目のない廷臣の養成所と見なされているのである。（HKN I 29）

このような、近世宮廷の権謀術数的世界は、おおよそは人々の共通知識となっていたところではあっただろうが、法王庁がその「養成所」の観を呈していたという指摘は、プロテスタントならではのものと思われる。

以上、ガイドブックの導入部分をみてきたが、18世紀後半にローマをめざした人々の「期待の地平」がかすかに見えてくる感がある。フォルクマンが「見るに値するもの（Merkwürdigkeiten）」として示すものは、これに続く、詳細をきわめた各地の案内記事である。その記述の特徴、現代との比較などについては稿をあらためて論じたい。

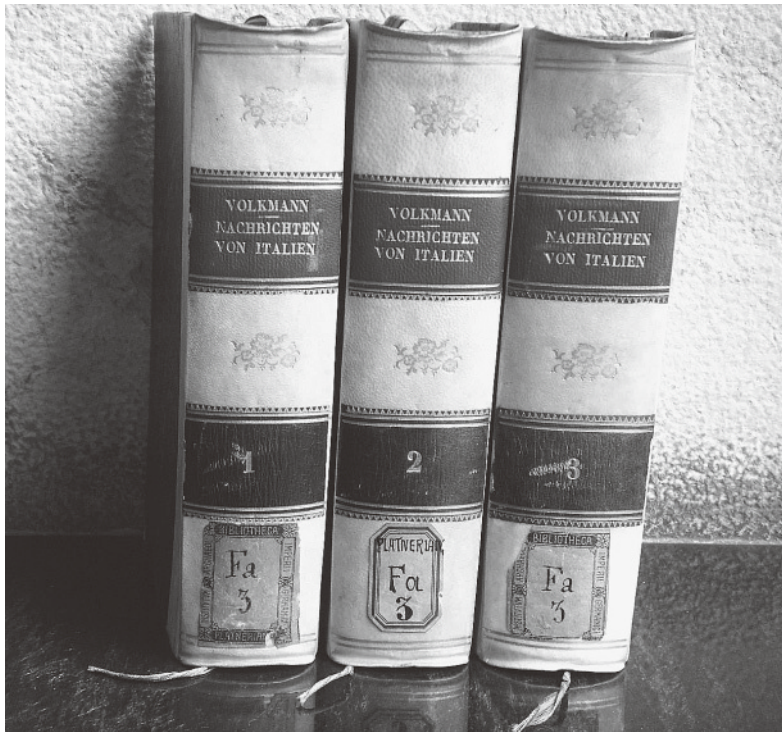


図1 フォルクマン全3巻



図2 フォルクマン 扉見開き

注

テキスト

フォルクマンのテキストは

J. J. Volkmann: Historisch-kritische Nachrichten von Italien, welche eine Beschreibung dieses Landes der Sitten, Regierungsform, Handlung, des Zustandes der Wissenschaften und insonderheit der Kunst enthalten. Leipzig 1777 (2)

を用いた。引用はなるべく本文中で、第1巻10ページを(HKN I 10)のように示した。また序文の場合はページがローマ数字であるので、(序文XX)などのように示した。

¹ ゲーテの「旅日記」は次のものを用いた。Johann Wolfgang Goethe: Goethe Tagebuch der Italienischen Reise 1786. Insel Taschenbuch 176. S. 57

² Tagebuch, S. 44

³ ゲーテの「イタリア紀行」の引用はつぎのものによった。Hamburger Ausgabe von Goethes Werken, Band XI. 10., neubearbeitete Auflage, München 1981. S.

⁴ Italienische Reise, S. 103

⁵ Italienische Reise, S. 332

⁶ Italienische Reise, S. 455 (1787年12月、報告)

⁷ このテーマの研究としては、

Pütter, Linda Maria: Reisen durchs Museum: Bildungserlebnisse deutscher Schriftsteller in Italien (1770-1830). Hildesheim/Zürich/New York 1998 を参考にした。

⁸ 本城靖久「グランド・ツアー 英国貴族の放蕩修学旅行」(中興文庫) 1994、等。

⁹ Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Leipzig 1877. Bd. 10, S. 1580. Artikel „historisch“: adj. geschichtlich: historische studien machen; was hier erzählt wird, ist streng historisch; der brief wird dir recht sein, er ist ganz historisch (enthält nur bericht, keine reflexion). GOETHE 16, 14

¹⁰ HKN Vorbericht zur ersten Ausgabe von 1770, S. IX

¹¹ Maximilian Misson: Reisen aus Holland durch Deutschland in Italien. Leipzig 1701.

¹² Jérôme Lalande: Voyage d'un François en Italie. Paris, 9 Bde, 1769.

¹³ ゲーテもときに、カトリックを見る自分の目を「プロテスタントの厳格さ」と揶揄している。「私の新教徒的原罪がたちまち頭をもたげてこの知れ渡っている慣習的なミサがまったく気にならなくなってきた。」(1786年11月3日) Italienische Reise, S. 127